

注文の多い言語学

千野栄一著



注文の多い言語学

千野栄一 著



大修館書店

著者略歴

千野 栄一 (ちのえいいち)

1932年東京に生まれる。東京外国語大学ロシア語科，東京大学文学部言語学科，カレル大学（プラハ）哲学部スラブ学科卒業。現在東京外国語大学教授。言語学および東欧の言語・文化専攻。

著書—『言語学の散歩』『言語学のたのしみ』（以上大修館），『チェコ語入門』（白水社），『ポケットのなかのチャペック』（晶文社），『外国語上達法』（岩波書店）他

訳書—チャペック「足跡」等8編（『現代東欧幻想小説』白水社，収録），ヘルツィーコパー著ミレル絵『しりたがりやのこいぬとみつばち』他

注目の多い言語学

© E. Chino 1986

1986年2月1日 初版発行

定価 1400円

検 印

著 者 千野 栄一

省 略

発行者 鈴木 敏夫

発行所 株式会社 大修館書店

(101) 東京都千代田区神田錦町3-24

電話 東京 (294) 2221 (大代表) / 振替 東京 9-40504

組版 / 写研 製版・印刷 / 横山印刷 製本 / 牧製本

ISBN4-469-21133-8 Printed in Japan

注文の多い言語学 ■ 目次

I 注文の多い言語学

1 ● 宮沢賢治のテクニック

3

2 ● 通訳の孤独

19

3 ● 翻訳者は文扼者

35

4 ● 檉鳥の死

51

5 ● 特別料理「エルガティーフ」

65

6 ● 三点は一平面を決定する

81

7 ● WとBの邂逅あるいはバッハの瞑想曲

97

8 ● イカイカあがれ

111

9 ● 限りなく透明に近い“晴”

127

10 ● もう一度文字について

141

11 ● かくし味

155



II ことばのミステリー

12 ● ことばのミステリー 173

13 ● なぞなぞの言語学 193

14 ● 日本でいくつの外国語が学べるか 203

15 ● ことばの「汚染」 217

16 ● 格談義 227

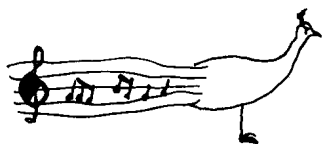
17 ● よいレポートとは 237

18 ● 倫敦巴里の文体論 251

19 ● 二兎を追う者は 273

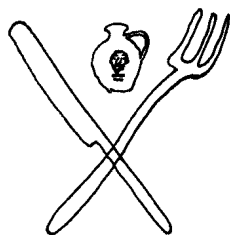
● あとがき 303

● 初出一覧 306



第I部

注文の多い言語学



Ⅰ
●宮沢賢治のテクニク



本書の題名をみて、首をかしげられた読者のために、まずこんな題の出てきたいきさつから話を始めよう。本書の第一部は、かつて雑誌「言語」に連載されたものであるが、その時の連載タイトルが「注文の多い言語学」であった。それが決ったのは、何年か前のある日、編集部から、そろそろ連載の時期も迫ってきましたので、連載を通じて使うタイトルを考えていただかないと困りますという、きびしい連絡があったときのことである。誰もが難しいと思いがちな言語学を誰にも分かるように、しかも面白いものを書くという、絶望的に困難な課題を引き受けてしまったむくい、と四苦八苦しているうちに、いよいよ締切りの日が来た。何しろ、この雑誌では次号の予告を載せるので、次号から始まる連載の題が未定というわけにはいかないのである。

「あの、タイトルもうできましたでしょうか？」という電話がかかってきたとき、とつさに答えたのが、「注文の多い言語学」というタイトルであった。もちろん経験豊かで、良識ある編集者が、素直にこのようなタイトルを受け入れたのではない。まず一言、「分かりにくいですね」

と、先制のジャブを放つと、電話の向う側で黙っている。もし、テレビ電話であつたら、このタイトルを変えてくれないかなという顔がありありと写し出されたに違いない。しかし、こちら側にも、これ以上よいアイディアはないし、くどくど弁明するのは江戸ツ子らしくない。やがて賢明な編集者が考え出した対策は、「新連載Ⅱ注文の多い言語学へ言語学のおもしろさ」で、これが目次予告にのつたタイトルであつた。

このタイトルを考えついたのにはわけがある。かつて同じような趣旨、すなわち、分かりやすく、明快で、面白い言語学入門を書かないかというお申し出があつたとき、必死になつて本の題名を考え、つい題名が考えつかなかつたため、その本自体もできなかつたといういきさつがあつた。曰く、「百万人の言語学」「涙なしの言語学」「誰にも分かる言語学」から、ついに「馬にも分かる言語学」という案も出たが、「馬を知らない人のたわごとですな、馬がどんなに伶俐で、どんなに敏感であるか知っていたら、こんなタイトルはつけられないはずです」といわれて、実際に馬を知らない私は黙る以外はなかつたのである。

さて、この「注文の多い言語学」というタイトルは私の創作ではなく、一種の盗用で、多く

の読者の方はすぐ、これが宮沢賢治の「注文の多い料理店」をもじったものであることに気がつかれたことと思う。このタイトルを考えついたとき、私にはもう、原本にある看板「西洋料理店 山猫軒」の中に自分の名前が書かれてある様子すら目に浮んでいた。

童話の好きな人なら、まず間違いなく読んだと思われる名作「注文の多い料理店」ではあるが、何かの都合でこの作品を読まなかった方と、読むには読んだが、もう昔のことで忘れてしまったという方のために、ごく手短に、この小品の梗概を述べると次のようになる。なお、作品はたった十頁程の小品で、実にコンパクトに書かれており、私の梗概なんぞより、原典をお読みいただいた方がはるかによいのであるが、話を進める都合上やむを得ずすることと了解していただきたい。

話は二人の西洋かぶれの紳士が森へ狩に行くところから始まる。しかし、この日は不猟で、しかも、どうしたことが、連れていった二匹の猟犬もめまいをおこし泡を吐いて死んでしまう。そこで二人は猟を止めて帰ろうと思うが、急に空腹であることに気がつく。そのとき、そこに「西洋料理店 山猫軒」がある。

この料理店は一風変っていて、いろいろなことが書かれてあり、扉にも「当軒は注文の多い料理店ですからどうかそこは御承知ください」と書かれている。その裏には「注文はずいぶん

多いでしょうがどうか一々こらえて下さい」とも書いてある。さらに、髪をきちんとしろとか、はきものの泥をおとせとか、鉄砲と弾丸をここにおけとか、帽子と外套と靴をとれという風にいろいろ注意がある。やがて、金物類は身につけるな、クリームを手や足に塗れ、香水（実は酢）をふりかけろ、塩をぬりこめと要求はエスカレートして、二人はやがておかしい気がつく。そして、逆に食べられそうになった二人が泣いていると、死んだと思っていた犬と猟師が助けにきて、あやしげな動物にたぶらかされていた二人が助けだされるという筋である。

この作品にもられた思想や、作品と作品外の現実との関係、さらに、この作品の読者の受容の問題などはここでとりあげる領域ではなく、もちろん、私の能力の及ぶところでもない。私の問題にするのは、近年とみに問題となっている言語学的詩学の立場からのこの作品の分析で、より正確に言えば作品の分析への若干のヒントということになる。

まず詩学とは何かということを定義しておかなければならないが、詩学は文学理論の一部で、文学作品の形についての科学、すなわち、文学的形態論と定めておく。

「注文の多い料理店」は言語学的に見て非常に面白い作品である。この作品の面白さは言語

の曖昧性を利用した点にある。すなわち、「料理店」と「注文の多い」との関係が意識的に曖昧になっていて、話の進行につれて、読者は自分が勝手に想像していた関係とは別の関係が、話の主な筋であることに気がつくように構成されている。「料理店」と「注文」という語は、例えば「しかし」と「ふるえる」というような単なる単語と単語の関係よりも、より密接で、この二つの語は定められた狭い範囲の中で共存する語であり、この場合、「人が料理店にきて注文する」というのが一番可能性のある組み合わせである。もし、連想語辞典で「料理店」という語をひいたとしたら、レストラン、食堂、コック、カツ、ウェーター、メニュー、支払うなどの語と一緒に、注文するという語が出てくると考えられる。また逆に、「注文する」という語に対しては、洋服、料理、酒屋、キャンセルする、などが出てくると想像するのは困難ではない。すなわち、「料理店」と「注文する」は相互に存在が依存されている語である。そして、この二つの語の組み合わせでは「料理店で注文がなされる」のが普通で、料理店で注文するのは客、注文されるのが料理店である。ところがこの作品ではその関係が逆になっている。読者がしだいに逆の関係に気がついていくようにするところに作品の技巧が必要とされ、もし最初からその逆の関係が読者に分かっているとは面白くない。そこで作者は二つの工夫をしている。

一つは、二人の客が注文されるたびに、注文されることを合理化していくことで、例えば、

「注文が多いからがまんして下さい」というのは、注文が多いから支度に手間取るからと考えるし、「髪をきちんとし、はきものの泥をおとせ」は、作法の厳しい家だと考え、「鉄砲と弾丸をここへ置け」というのも、鉄砲を持つてものを食うという法はないという風に説明する。読者もこの二人と同じ考え方をしていく。そして第二に、その注文の並べ方が最初は常識的なありうるものから、やがて合理化の説明が苦しくなり、読者が首をかしげるような内容に変わっていく、ついに破綻したとき、この作品の種明しがなされる。

ここでもう一つ、この題の下敷きになっている「注文の多い料理店」という句の構造について考えると、「注文の多いお客」「注文の多い患者」というような句と、見かけ上同じ構造を有している。ただ、普通には「注文の多い」の下に来るのは、その注文をする主体であって、人間の場合が普通である。すなわち、お客が注文を出し、患者が注文を出すのであって、この構造から行けば「注文の多い料理店」は、料理店が注文を出すことになり、結局はこの作品の内容を正確に伝えていることになる。ところが普通は人であるところに、「料理店」がきていることと、前に分析した「料理店」と「注文」という語の連想的な関連性が、読者をして、「料理店が注文する」という理解を素直に受入れさせないのである。「注文の多い料理店」が何とはなしに不安定な感じを与えるのはそのためといえよう。

ところが「注文の多い言語学」となると、「料理店」と「注文」という二つの語の連想的な関連性も失われるので、拙文の冒頭に述べたように、担当の編集者が不自然に感じて、「分かり難い」という反応を示したのは、読者にスムーズな文を提供することに関心のある編集者の立場としては当然のことといえる。

さて、宮沢賢治はひねった題で読者の関心をひきつけているが、工夫はこれだけではない。

書出しのところを見ると、「二人の若い紳士が、すっかりイギリスの兵隊のかたちをして、ぴか／＼する鉄砲をかついで、白熊のやうな犬を二足つれて、だいぶ山奥の、木の葉のかさかさしたところを、こんなことをいいながら、あるいておりました」とあり、この書出しは大部分の童話の書出しが簡潔であるこの作者の作品の中では例外である。これはこの作品が情緒的な描写をする作品と違って、一種の怪奇短篇であるためで、作品中の文の終りも、作品の初めから見ると、ました、でした、でした、ました、ました、ました……と、一本調子の繰返しが多いし、どうやら、モーラの数や、その数の組み合わせも、詩的表現を感じさせるものとは異なっているように思われる。

宮沢賢治の研究は筑摩書房の『校本宮沢賢治全集』が出て、草稿や異本まで見ることができ、大変便利になったが、残念ながらこの「注文の多い料理店」には、印刷用原稿も下書稿も現存しない。しかし、筑摩版の書いているところによると、この短篇を含む『注文の多い料理店』なる本を刊行した折に作られた大小二種の広告用のちらしがあり、そこには次のように書かれている（筑摩版第十一巻三八八頁）。

(c) 広告ちらし、『注文の多い料理店』刊行に際して作られた大小二種の広告用ちらしが現存している。いずれも黒赤の二色刷りで、そのカラー写真を本巻（筑摩版）口絵に掲げたので、内容はそれによつて見ていただきたい。そのうち、恐らくは賢治自身の文案（傍点筆者）によると考えられる部分のみを以下に掲出しておく。

「……**④** 注文の多い料理店（題名は赤刷り）、二人の青年神（紳）の誤植）士が獺に出て路を迷ひ『注文の多い料理店』に入りその途方もない経営者から却つて（傍点筆者）注文されてゐたはなし。糧に乏しい村のこどもらが都会文明と放恣な階級とに対する止むに止まれない反感です。……」

小の方のちらしも、『目次と……その内容』の部分とほぼ同じで、大型ちらしに若干みられ